

小倉智昭 連載

Attacking the

Deep Zone

[第32回 スピーカー編]

音響機器というより これはもう楽器

かねてから小倉さんが「ヘイルメリーハウスが完成したらぜひセットしたい」と言っていたスピーカーが「エムズシステム」だ。今回取材したスケルトンタイプは、アンプ内蔵型スピーカーで、小倉さんのために開発者の三浦光仁さんが作ってくれたものだという。左右両サイドにユニットが装着された、まるで和太鼓のようなスピーカー。サウンドを聴いて驚いた…

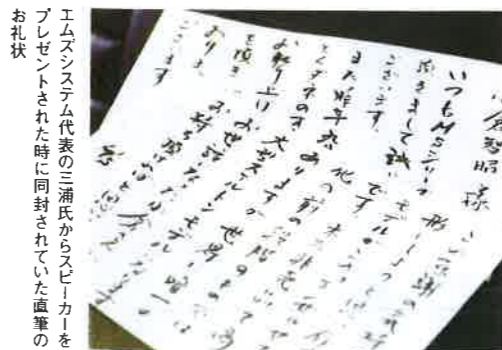
Tomoharu



エアコンのような存在
という発想も面白い

「このスピーカー、面白い形でしょう？ パッと見ただけでは、とてもスピーカーとは思えないですね。実はこれ、エムズシステムというメーカーが出している。波動スピーカー」というものなんです。7年ほど前にオーディオ専門誌で見つけたのですが、とても評価が高かった。実際に音を聴いてみたいと思ってショールームを訪ね、じっくり聴いてみると確かにいい音でした。形もユニークなので、早速『とくダネ!』に持ち込んでオープニングトークで紹介したんです。心地よくて優しい音がある変わったスピーカーがあるってね。すると、それを知ったエムズシステム代表が開発者の三浦さんが、お礼にとこのスピーカーを贈ってくれたんです。当時は未

取り込んだハイレゾ音源をプレーヤー経由で直接流しているのですが、十分にいい音。普通のスピーカーと違って指向性がないから、どこにいても自然な音が聴こえてくる。だから部屋のと真ん中に置いてもいい。三浦さんは、音のエアコン」と表現しているそうですが、言い得て妙ですね。どこからともなく部屋で音が鳴っている感じです。前に座ってじっくり耳を傾けるタイプのスピーカーとはま



た違う心地よさがあり、それでいて定位感もあるので、臨場感のある音が楽しめます。値段も10万円台から20万円台と、スピーカーとしてはリーズナブルなので、気になる人は視聴してみてくださいいかがでしょうか？

こういう新しい感覚のスピーカーに惹かれる一方で、古いスピーカーもますます魅力的に感じています。自宅と北海道の別荘のオーディオルームには、アメリカのメーカー「アルテック」のヴェンテージスピーカーを入れていたのですが、これがまたいいんです。劇場用に作られた業務用スピーカーで、人の声が一番よく聴こえるように作ってあります。映画を観るには絶好です。現代のスピーカーって低域も高域も人の耳では感知できないくらい幅広いレンジの音が出せますが、最近よく聴いている昔のジャズなんかだと、むしろ上と下が出過ぎない方が心地いい。その点、アルテックのスピーカーは必要な音がしっかり出るのでもっともいい。同ジャンルテックの真空管アンプに繋がるとまたいいんですよ。アンプもプレーヤーもデジタルになってきましたが、最終的な音の出口であるスピーカーは絶対にデジタルにならない。だから、どうしてもこだわってしまうんですね」



贈られた当時は世界唯一の大型スケルトンモデルの波動スピーカーだったという。「エンゼルセブン」と名付けられている通り、スケルトン部分に7体の天使の人形が置かれている。従来のスピーカーとは異なり、左右2本ではなく1本のみで、まるで楽器のように360度、空間全体に音を響かせるのが特長

M's systemの人気機種「MS1001」シリーズ

エムズシステムのスピーカーの中でも人気の定番モデルが、MS1001シリーズ。直径200mm×幅400mmというコンパクトなサイズでありながら、臨場感のある自然な音を楽しむことができる。ボディには上質なウッドを使用しているため、インテリアにも映える。また、コンパクトなので置き場所に困ることもない。接続も簡単で、アンプにつながっている左右のスピーカーケーブルをこれ1つにつなぎかえるだけでOK



小倉家に鎮座する ALTECのスピーカー

上の写真は小倉氏の自宅のオーディオルームでアルテックのA7をメインスピーカーに据えている。下の写真は北海道の別荘のオーディオルームで、こちらにはアルテックのA5を採用。「以前所有していたA7はキャビネットがひび割れてしまったので、LAでキャビネットを探してもらい、別で見つけたスピーカーユニットを組み込みました。A5は文化放送がスタジオを移転する時に廃棄されそうだったものを破格の値段で譲ってもらったんです」

